

◎「いやあ あけまして おめでとうございます」どなたともお会いしなかったのでパソコンに向かって挨拶をしてみた、苦笑。今日は正月一日、一年の始め、おめでたいハレの日である。まわりのアジアの国も正月が一年で一番ハレの日らしいが、日本と違って旧暦を使用しているので一か月ほど遅れた時期に正月を祝っている。

◎太陽暦は1年が365日に対して、太陰暦は月の満ち欠けを計算し1年が354日らしい。日本は明治時代に太陽暦を取り入れ現在に至っている。太陰暦で正月を祝うのは、中国、韓国、台湾、ベトナム・・・など。

◎今日は寒い、寒波が来ているらしくヒエヒエだ。12月下旬に大寒波が来た、その続きで寒波が居座っているらしい。「今日は ちょっと 暖かいね」という日はいつ来るのだろうか、ヒエヒエの日が当分続くようだ。ずっと、「今年も 雪かきに 行ってくるよ」と毎年2月に出かけていた富山県、この2.3年、「暖冬だ、雪が降らないなんて 住んでいる人たちには ありがたい 冬だけど・・・」という雪が少なかった。「今年も 雪かきに行かなければ・・・」と連絡をいただいたが、どうなるかな。富山県といっても高速北陸道“金沢東IC”を降り、石川県境から10キロほど入った富山県高窪という村だ。丁度その家のそばに道路監視カメラがある。先日までは路面が真っ白だったが、今日はアスファルトが見え、両サイドには1メートルほどの積雪。

◎土手の上を走っている、風はほとんどないが空気が冷たい。そういえば先日来、「北風ピ〜プ〜吹いている」ノトオリ、アトリエの中でも風の鳴き声が「ヒュ〜ンピュ〜ン」と聞こえていた。洗濯物は両サイドに洗濯ハサミで止めるのだけれど、風に押しやられ裏返し、ちじこまり、ひっくり返し、それでも夕方には乾いている。乾いていると思うが、冷たいのでそのままこたつの中に押し込んである。我が家の洗濯は、オレの仕事、朝7時ころに起きるとまず風呂を開け、湿っていないか点検。その足で洗濯機へ直行、洗剤を入れスイッチを押す。飯を喰って雑用をすませ、洗濯物を干す作業、毎日8時には洗濯物がはためいている。

◎安威川の河川敷や中洲にはススキの穂が白い綿になって揺れている。先日晴れた日に、カメラを持ってきた。ススキの白い綿が青空に映えうまく撮れた。逆光のススキはキラキラ輝き幻想的だ、太陽を入れるとこれまた妙に輝く、もっと幻想的だ、てなことで遊んでいた。

◎今日の空は青い部分と、白黒のもこもこ雲が半分ずつ、雲いっぱい青い空、青空と雲のどちらが多いかという空だ。

◎コロナめ、いつまで居座るのか、もう2年が過ぎた、オレの展覧会は3回目の休み、こんなに長引くとは、こんなに何もかもが冷え切ってくるとは・・・あきらめなければいけないが、腹立たしい。

◎カモとオオバンの20~30匹の群れ、同じように混ざって草か何かをついばんでいる。ちょっとずつ、カモとオオバンがそれぞれ集まっているような気もする。オレが近づいていくと、ペタペタと川の方に避難、より近づくといっせいに川の流れに飛び込んでいく。カモはいったんフワリ舞い上がり流れの中ほどに着水、オオバンは流れのそばまでペタペタ、そこから流れに向かってジャンプで着水する。「オオバンは 飛ぶのが 苦手な鳥なのかな いやいやそうではありません 彼らも立派に 海を渡って やって来るそうだ」

◎今日の水の流れは、風がないのでいたって静か、ほとんど流れていないような水面は向こうの草やら空やらを写している、この景色が昔の水墨画を想わせお気に入りの景色だ。

◎12月中旬頃のアトリエ、床にいくつかの絵を並べ、いつものように思案していた。「どう攻めるか どこを塗るか 何色を塗るか・・・」そんなこんなを考えていた。「カドミウム・レッド・ディープ 缶に 少し残っている・・・」そうだあれを使ってぐいと塗ってみよう。缶に残っている絵の具を取り出しコネコネし、薄め、かき交ぜ、また薄め、「おお いい感じ いい練り具合 これがいい・・・」それではこの絵の具を、「ばっさばっさ」塗るぞ、たっぷり太い筆に含ませ絵の具を置いた。次も置いた、またその次も置いた。「置いた おいた がっはは うまくいった 今年の最高賞かな いい絵ができあがった」◎出来上がった絵を見ながら、「いつもいうじゃないか あまりひつこく 追うな」「すかっと 終えろ」これがなかなかわからない、わからないままに、次の色、次の線、続けていると、ドツボにはまる、オレの悪い癖だ、と 反省。

◎正月は寒波という予報だったが、寒かったのは一日だけ、二日の昼に安威川に出ると陽が照り暖かい、「これなら 近所の山なら 行けるぞ 明日 愛宕山へ行こう」と決めた。

◎またまた失敗は、「バス賃が230円」と調べた、10円玉を用意した、なのに電車の切符を買うときに硬貨を使ってしまった。「帰りの230円がない」仕様もないことで大いに悩んだ、困った性格だ。

◎9:10: 出発。バスを降り舗装した坂道を下っていた、「あへ〜」するりと行きそうでびっくり、凍っていないが先ほどまで凍っていた水溜まりかな、情けない、「おととと〜」である。バイクのあんちゃんが橋の所でガシャリこけていた、難なくバイクをおこして進んで行った。橋の横に荷を置き、用意をした。スパッツを着け、ピッケルのカバーを外し、ダウンジャケットをザックにしまった。林道歩きなのでサンドイッチを喰おうとそれも出してポケットにいれた。

◎お陽さんが出てきた、ここは林道、まわりは針葉樹の植林で薄暗い、まだらに陽が射すがまだ風は冷たい、下に川が流れているのでよけいに涼しい感がある。それでもお陽さんが照ってくれたら少しずつ暖かくなりそう。サンドイッチをかじりながら雪解け水でぬれた道を歩いた。ここらあたりの山は1000メートル足らず、てっぺんにも樹が生えている。信州のような尾根道散歩はところどころにしかない、そのぶん、樹々を、森を楽しまなくては・・・。

◎月輪時への登山口から登っていく。大杉谷からという手もあるが、大杉谷にトレースがついて無いなら、オレひとりでラッセルして上まで登る自信がない、そのてん、月輪時から人は入っているはず、と読んだ。もっとも上に行って、大杉谷との合流点で、大杉谷の道にもトレースが付いていることを確認した。

@トレース：山に雪が降れば登山道も何もかもが真っ白になる。まずトレース（踏み跡）が付いていないと“道”がわからない。雪が50センチ1メートル積もると、歩けない、登れない。急な登山道を登ろうとすれば、足が雪に潜る、ズルズル滑る、雪のない季節なら10分で登れるところが、1時間もかかってしまう、しかもものすごくしんどい、重労働である。「おおい 変わってくれ」パワーのあるやつが順番に、「エイヤ〜 コラヤ〜」がラッセルだ。冬の背の高い山、どこかの山岳部が、「エイヤ〜 コラヤ〜」のラッセルで道を作ってくれる、「ありがとう」と軟弱な我々は登っていく、それがいつものパターンだった。

◎月輪時の手前あたり、ここは南東向きの斜面、雪がべちゃべちゃ融けてきている。歩いているところは土が見えているが、両サイド、山の斜面には20,30センチの雪が白く残っている。どこの山でもそうだが、北斜面はもっと雪深いかもしれない、しかも陽が当たらないので雪はなかなか融けない。

◎おそらく人が多いだろう、直下の岩があるところで飯を喰おう、と決めていたが、その場所には人がいた。ええいもうちよい上へ、そこにも人がいたが、先の方に丸太が転がされ、座れるところがあるので腰を下ろした。弁当は昨夜から作っていた、サンドイッチも作っていた。朝は飯を喰い、ペットボトルに茶を入れただけ。

◎月輪時から表参道を通る反時計回りで帰ろう、表参道を通るのも久しぶりかな、と考えていた。まだ今日は正月の三日、「表参道は超満員」とおっしゃる。愛宕山には愛宕神社がある、これは京都の人にとって有名な神社らしい、「火の用心」の神様らしい。なんとかつては修験道の寺でもあったらしい。

◎お宮さんを後ろに見て歩き出した。石畳、人が踏み固めた階段の雪、滑るかなと思ったが、靴の横っ腹、靴のかかとをうまく使い、ピッケルで支えればばっばらばっばら歩ける。今日は全行程アイゼンなしで行くぞと決めどンドン下った。超満員とおっしゃるが、人はまばらとはいえ、常に前や後ろに人影はあった。てっぺんあたりは積雪50~70センチぐらいだったかな。

◎3:00 バス停まで下りてきた。前回より元気だ、嵐山まで歩こう、バスもないようだ。5キロぐらいの距離ゆっくり歩いた。渡月橋のあたりは観光客で満員である。

◎全行程アイゼンなし、ずぼ足で歩いたが、ここに来ている方々のアイゼンは見たことのないタイプ、調べると最近の軽アイゼンは今までのものと違うようだ。ワカンやスノーシューの人もいたが少数派、ピッケルの姿は一度もお目にかかれなかった。鉄ものでザックが重い、次回は軽くするかな。

はやぶさからの贈り物：朝日新聞 <鳥の話が多かったが、これは 宇宙の話>

- ◎ 何をいまさら、と笑われるかもしれないけれど、図書館の書架から、「あ 懐かしい もういっぺん ぱら ぱら してみるか・・・」と借りてきた。新聞社の本なので、興味深い話、感動的な話、ニュースになる話、こんなことが盛り込まれているが、当時、「おおお やったねえ」と感動した気持ちがよみがえる。
- ◎ コロナめのおかげ、なんだかじめじめしている、しっけている、「え なにが」「気持ちじゃ 心じゃ ぱつとせんやないか・・・」これはえかきジジイのぼやきである。ロケットに“はやぶさ”と名付けられた衛星を積み宇宙へ打ち上げられた。ロケットは燃え尽き天空で衛星が残り、その衛星が自力で羽を広げ宇宙の果てに向かった。果てといってもそこそこの果て、そこにある小さい惑星に着陸、その惑星の土なり石なりを採取して地球に持ち帰ってくる。簡単にいえばそういうことだが、3年4年の歳月、火星の近所というという遠さ、わからないことだらけ、失敗だらけのミッション、最後の土壇場で、「成功した」というハッピーエンド、これは嬉しくなるストーリーだ。
- ◎ そういえば、映画やドラマの話、友人が、「ハッピーエンドの 物語しか見ない」「失敗したり悲しい終わり方はいやだ ハッピーエンドじゃ」といっていた。オレもそうだね、2時間3時間の物語はハッピーエンドに限る。そのてん人生は、良いこともあり悪いこともあり、その繰り返した。いいことが続けばちょっとした悪いことでも気持ちがおいおいに落ち込む。悪いことばかり続きおいおいに気持ちが落ち込んでいる時に、少しばかり良いことがあるだけで、「おおお はっぴー〜」と悦んだりする。「バランスだよ 上があれば下がある・・・」そんなことはわかっているけれど、「うれしいなあ」「かなしいなあ」これでいいじゃない。
- ◎ エンジン：化学エンジンとは燃料を燃やす。はやぶさはイオンエンジン。キセノン燃料をイオン化して噴射する仕組み。そう簡単におっしゃいますが、まずはちんぷんかんぷん。これ以外にも、ロケットのこと、衛星のこと、アンテナ通信のこと、そんなこんな全てのことがわからない。科学技術の難しい部分、それでもこんな技術を駆使している方々に、「すごいねえ がんばって・・・」である。
- ◎ 一年かけて“スイングバイ”この地球スイングバイを成功させるためには正確な軌道制御が欠かせない。「なんだ それは・・・」この技術もなんのことだか知らなかった。宇宙のはてに飛び出すには天体の運動と万有引力：重力を利用する。大きな星、今回は地球のまわりをかすめ飛ぶことにより、大きな力を得る、その推進力でイトカワに向かって進む。簡単にいうが、このかすめる軌道、これがちょっとでも計算間違いで狂うと目的地には行かないのだそうだ。
- ◎ 二年後に衛星はやぶさは、目的地の惑星イトカワに到着した。到着といっても20キロ離れた所で静止していたらしい。地球から3億2千万キロの距離、命令通信は直径60Mのアンテナらしい。
- ◎ 衛星はやぶさが、小惑星の地面に降り立ち、そこにある石なり土なりを拾って（ひらうは関西の方言だって・・・）帰って来るという作業、簡単にいうけれどなかなか大変な作業、しかも機械に対してアンテナから指令を送る、機械がそんな微妙なことをやってのけられるのか、指令が届いているやら、無視されているやら、返事が返ってこない、通信が途絶えた・・・そんな話が次々続く。
- ◎ クライマックスはオーストラリアの大地に、隕石のように衛星が輝く閃光を残して燃え尽き、サンプルの入った缶だけが無事回収されたことだ。「ほんとにかえってきた しかもサンプルが採取できた」喝采したね。
- ◎ ハヤブサが行方不明になった、イトカワの近所にいるだろうが通信が途絶えた。「故障はなく ただ 通信ができないだけ では・・・」太陽の周りを公転する地球とイトカワの関係から、チャンスは3年に1回しかない。通信が途絶え命令が下せないなら、地球帰還は3年先になる。「月日が長いほど 機器が故障する危険性はあるが・・・辛抱強く待つしかない」
- ◎ パラボラアンテナの画面を見て、「これ なに・・・」画面のさざ波の中に一つだけ違う波がある。「どこに行った どうなった・・・もうだめか・・・」「ええ あの波は それじゃあ・・・はやぶさだ」「えええ 生きていたか・・・」「なんと はやぶさは まだ死んでいなかった・・・」感動の場面。

◎安威川の河原に来ている、正面にお陽さんが見へ、「暖かい」といっても3時だからお陽さんはもうだいぶ傾いている。日暮れがだんだん遅くなってきている、二三日前の寒さはない。そう先程、友人たちとのZOOM井戸端会議、「東京は10センチの雪 つるつる滑って かわいよお」「福井に住んでいた頃は・・・」「自転車ですってんころり 骨を折った・・・」雪よりも氷がこわい、先日の愛宕山でも山の中に入ってしまうと雪の中、歩きなれたものだ、靴のエッジで雪をつかまえザックザック歩けるが、舗装された路面にうっすら氷、これはてきめん滑る、すってんころりである。何日か前までダウンジャケット、毛糸の帽子、ネックウォーマー、これだけ身に着けていても汗が出てこなかった。それに比べ今日は暖かい、ダウンジャケットを脱ぎそれを腰に巻きつけ、お陽さんに向かって走っている。先日の愛宕山も暖かい日に当たった、雪の上をザクザク歩きながら、お陽さんが眩しく光る、冬のさなか暖かいのが一番いいねえ。

◎ZOOM井戸端会議で、ひとりが、「しまなみ海道を 旅行してきた」と話していた。「8人という 少ないツアーだったので よけい よかった」と言っておられた。オレはZOOM井戸端会議は得意でない、なかなかうまくしゃべることができない。それは二人だけの電話の時もそうで、長電話は嫌い、「あ そう わかった そんなじゃねえ」なんて聞くだけきき、言うだけいい電話を切る。「愛想のない奴だな」と思われているだろうね。ZOOM井戸端会議も、皆さんの話を聞きながらにやにや笑うだけ、話の間に入って、こうだあだとなかなか言い出しにくい。それでもってZOOM井戸端会議が終わってからいろいろ思い出し、このようなことを書いている。

◎しまなみ海道は5回6回走ったかな、とにかくきれいなところだ、空が満天に拡がり青に白の雲が飛び散る、島々が近くに遠くに点在し、川の流れのように海の潮が飛んでいく。おもちゃのように小さい島、でっかい島、橋から離れた所にも島が点在する。そんな島には船でないと行けないだろうね、なんて想像する島々。日本画家の〇〇さんと、書家の三島さんは知っていたけど、本因坊：碁の人は因島出身。

◎60歳前ぐらいだったと思うがはじめてしまなみ海道を訪れた。尾道から1番目：向島か2番目：因島の、島のどこかで、ひとりで車中泊をした。車に、寝具・鍋・自転車・絵の道具、など積んで走っていた。今ならネットで検索をし、「おおお いい所が いっぱいあるんだ もう一度行ってみたい」と思うが、当時はそんなふうには検索するすべもなくただ漫然と車を走らせ、面白い風景なり気になった空気を探していた。朝起き、車を置いて四国方面に自転車で行こうと計画して走り出したが、これがたいへんだった。しまなみ海道は車専用的高速道路なので、自転車や歩行者は、海の上は車道の横に歩道があり通れるが、それ以外は下の地道を通らなければいけない。橋に上がるためにぐるぐる道やら階段やらを自転車を押してまずエッチラである。橋が終わると地面に降りる、地上の道を島の端から端まで自転車で走る、橋の手前でまたエッチラである。次の橋を渡るためにいちいち地上に降りて、いちいち端から端まで自転車で地道を走る、これの繰り返しだった。橋の上がると簡単にいうが、これまた背が高い、高速道路は相当上の方を走っている。そんな上まで、えっちらおっちら自転車を押し上げ・・・さすがに疲れ、四国の手前の島でギブアップした。通行料徴収の缶がぶら下がっていた記憶だが、50円は払っていないかな・・・

◎相変わらず走るの遅い、だんだん遅くなってきている。普段、街中を歩くときも速度は遅くなってきている。先日も愛宕を登りながら、山の上り下りは普通に速い、苦もなく歩けるが、ひとたび舗装された道に出ると女の人にも抜かされてしまう。昔は街中で、だれよりも早いと思っていたのが不思議なくらい足が遅くなっている。河原で走っているとはいえ、早足で歩いているおっさん連と速度は変わらない。先日の雨上がりの日、水たまりを除けようと、ポンポン飛んだ。水のない所を探してポンポン飛ぶ動作がオレの身体は気に入ったようで、それから水溜まりが無くても、ポンポン飛ぶような走り方を時々するようにしている。後ろから見れば、「おっさん 酔っぱらって 走ったら あかんよ」と思われているかもしれないが、汗が出る、身体が軽くなる、気持ちがいい、なるべく飛ぶようにしている。

- ◎阪急電車嵐山駅で降り、清滝行のバス停に来た。すでに 20 人ぐらいの方が並んでおられる。前にも言ったがバスに乗る時は緊張する、加えて今日は終点の一つ手前の駅で降りなければならない、財布から 230 円をポケットに入れそわそわバスの来るのを待った。「これだけの人が並んでいるなら 前の方で立たなければいけないな」バスが来た、案の定皆さんが乗り始めると前の方は全席座っておられる、車いすマークの座席が 3 つ残っているが、「これは座るわけには いかないな」と前の方に立った。「え あんちゃんまで 車いすマークの座席に・・・」全員腰を下ろしオレだけが立っていた、笑うねえ・・・。「次ぎは 念仏前」そこでバスから降りた。
- ◎三宅さんが、「愛宕に登りたい」「それじゃ 天気の良い日・・・」と今日に決めた。三宅さんは南山城村から車で来る。「清滝トンネルの手前 念仏前あたりに 駐車スペースがあるよ」会う場所を決めた。京都市内は車の無料駐車が難しい土地柄だけれど、「ここは無料スペースなんだ」と以前から見つけていた。
- ◎9 時に登りだした。三宅さんは愛宕山が初めてというので、表参道から登ることにした。バスを降りた時は、「京都は寒い 清滝は冷える」と思っていたが、陽の当たりだし、参道は青空が広がりダウンジャケットをザックに、ジャンパーを腰に巻き登り始めた。一週間前にも愛宕山に来た、その時もお陽さんが出ていたがその前々日に日本全国寒波で雪が降り、愛宕山全部が雪山だった。一週間経ち寒波も遠のき、あれだけあった雪も融けているようだ。
- ◎表参道は平安時代から善男全女がお参りに列をなしていたのかね。お茶屋がたくさんあって、そこに暮らす人たちが朝になると店を開け、床几を出す、「だんご しるこ 甘酒・・・」なんて言っていたのかな。お地藏さんと石の標識、「ここに ○○茶屋が ありました」という看板がある。
- ◎「お茶屋には 梅干し入りの おにぎり・・・」なんていいながら、梅干しの話。市の健康診断で、血圧が高いと言われ、「食物で いけないものは 塩気は なにがよくないか・・・」と検索して驚いたのは、梅干しが一番に上げられていた。「来年から 梅干し作りはやめる」と決めた。以前から、「なんだかふらつく」という現象も無くなってきたのは、梅干しを喰わなくなったからかな・・・。
- ◎祭日の愛宕山参道は人が多い。若者の団体がにぎやかに登っていく。我々を追い抜いては、休憩してしゃべっている、「休憩の 取りすぎ じゃぞ・・・」とは言わなかったが・・・。
- ◎休んでいる時、「ケーブルの駅跡が・・・いい所ですよ」その話を聞き、「水尾の別れ” から中に入ってみた。平坦な道、ちょっと雪が深くなってきた、ふんわり雪を踏みしめながら歩いていくと、コンクリート造りの廃屋が出てきた。「おおお すごい」その廃屋は 2 階建ての頑丈そうなケーブル駅の跡、鉄筋がむき出した処、懐かしいデザインタイルが残っている処、ハイカラ紳士淑女が、京都の坊ちゃん嬢ちゃんが目に浮かぶ。
- ◎今日は GPS がなかなかいい感じに教えてくれる。昨夜じっくりとスマホ君に愛宕山の地図を教え込んだ。電車に乗りながらスマホを立ち上げ、バスを降りたところで、登り始めたところで、たびたび画面をのぞいてみた。ケーブルの駅跡は山の中、登山道から離れているが、矢印がオレの位置を教えてくれた。
- ◎疲れた、つかれたと言いながら弁当を広げた。弁当は昨夜のうちに作った。タッパにご飯と野菜炒めを入れた。サンドイッチをふたつ作った、お茶も入れた、スポーツ飲料も入れた。朝は朝飯を食うだけでいい。
- ◎三宅さんが 5 万円の時計を持っているという。「なにそれ」その時計はスマホと連動しているアップルウォッチという。時計としての機能、万歩計、その他簡単な機能はもちろん付属している。「これの すごいところは・・・」腕時計をしている本人が、動けなくなって、心肺停止になると、何秒かして、ブルルと 1 分間鳴るという。そのブルルで起き上がれない、覚醒しないとすぐに、救急車を呼んだり、身近の人に連絡するという機能を備えた優れモノだそうだ。「独居老人には 最適だ ひとりで倒れても 誰かが駆けつけてくれる」「いいでしょう・・・」「友達の 独居老人に 教えてもらった 買った」「ところがね、落とし穴がある」それは、その時計の電池持続時間が短く就寝時には時計を外して、充電しなくてはならないという。「寝ている間に オレが倒れたら 心配停止になったら なんとする どうする・・・」笑い話である。

またまた古事記が読みたくなって、いくつかの本を借りてきた。図書館にある古事記のことを書いた本は、ほとんどが古く本が傷んでいるものが多い。そんな本をパラパラ。

天照大御神：アマテラスオオミカミ：女性と、須佐之男命：スサノウノミコト：男性。このふたりは兄弟である。アマテラスと次の弟は、父：イザナギの命で、それぞれ“大空”と“夜の国”を治めていた。ところが末のスサノオは、「大海を納めよ」との命に背き大声で泣きわめいていた。

わんわんと泣き狂い、てのつけようがない。そのひどい泣き方は、青い山々の草木も、泣き声で枯れ、川や海の水も泣き声ですっかり干上がってしまう。いろんな悪い神々がその騒ぎにつけ込んでうるさく騒ぎまわった。おかげで地の上にはありとあらゆる災いが一時に起こった。そんなスサノウを見た父は、「そんな子はこの国においておけない 追放だ」

スサノオ、「追放・・・ ほお～ 姉のアマテラスに いとま乞いを・・・」そのまま大空の高天が原にどんどん登っていった。カいっばいズシンズシン乱暴に歩き山も川もメリメリゆるぎ、世界中がみしみし震え続けた。

大声で泣きわめくとか、みしみしと震える、これは大災害だ、噴火、暴風雨、地震、津波・・・を想像させる。「暑い 寒いは どちらがいやかね」と問われれば、「暑い 寒いは どちらも いやだけれど・・・」暑い時は暑い日がずっと続き、早く涼しくなってくれと願うが、その時は寒くてたまらない感覚を忘れてしまっている。同様に寒くてやりきれない時は、あの暑さが暖かく感じる。フラリフラリと左右に揺れるその感覚は、まさにフラリフラリ、右の時は左でなく、左の時は右でない。ヤジロベエのように単純な左右ではなく、いりくんだ360度全方位の揺れが永遠に続く。そらあ、永遠に続くと言ってもたかが知れた永遠だ、ほんのちょっぴり、だれもが気付かないぐらいの些細なことだ。

弟のスサノオがあんな勢いで登ってくる、ただごとではない、きっと私の国を奪い取ろうとしているに違いない。アマテラスは早速男装し、背中に矢を背負い右手に弓をもって待ち構えた。

「なにしに来た！」

「決して悪いことをするために 来たのではない 父が泣いている私をとがめたので 私は母の所へ行きたいと申し上げると たいそう怒られ 出て行けと言われたので 姉さんにお別れを言いに来たのです」

「悪い心がない 証拠を見せよ」

「それではお互い うけいをして 子を産んで 二人の心の良し悪しを見ましょう」

「三人の女神はスサノオの子 五人の男神はアマテラスの子」それぞれが生まれた。

「そおら 勝った 何の悪心もない証拠に 私の子はおとなしい女神ばかりだ」

うけい：正邪を判断する占い：吉凶を占う

「お互い うけいをして 子どもを産みましょう」

二神は天の安の河を挟んで、うけいをすることにします。

アマテラスはスサノオの十拳剣をもらい受け、三段に折り、天の真名井で振りすぎ、噛み、狭霧を吹き、三女神を生んだ。

スサノオはアマテラスが巻いていた、玉飾りをもらい受け、天の真名井で振りすぎ、噛み、狭霧を吹き、五男神を生んだ。

アマテラス、「先に生まれた 三柱の女子は おまえの持ち物から生まれた おまえの子だ」

スサノオが、「私の心が清く明らかなだから 私の産んだ子はたおやかな女神でした 私の勝ちです」
「勝った」と早く言ったもの勝ちなのか。このあたりのことがわからない、うけいとは・・・？

スサノウが宣言する。「そおら 勝った」「うけい」という、「正邪を判断する占い」に勝ったと勢いに乗って、スサノオは暴れだす。田の畔を壊し、溝を埋め、御殿にうんこをひりちらす。
アマテラスは、「なに ほっておけ」としばらくはスサノオをかばっていた。
スサノオはますます凶に乗って、皮を剥いだ血まみれの馬を機織り場に投げ入れた。機織り女がおさで下腹部（陰部）をついて死んだ。

牛馬の皮を剥ぐ、機織りをする、こんな作業はこの時代には普通にあった技術だろう。獣の皮を剥いで衣料にするのはそれこそ石器時代からの技術であり、あたりまえの風習。染織も盛んにおこなわれていた技術であり、あたりまえの風習。今でこそ華麗な工芸品にまでできあがっている革細工や布製品、弥生時代にはどの程度まで洗練されていたのか、縄文時代にはどうだったのかわからない。縄文人も毛皮や革細工、色に染められた布製品の衣料を持っていた。弥生人は大陸からの技術でもっと洗練された技術を持っていたのかな。それと日本人のおおらかさなのか、古事記に、下ネタとっては失礼だが、陰部（ほと）という言葉がよく出てくる。

アマテラスはとうとうスサノオの乱暴にいたたまれなくなり、天の岩屋という石室に隠れてしまった。アマテラスという女神は日の神様、その女神が岩屋に姿を隠すと、高天が原も下界の地上も、みんな真っ暗闇になって、昼と夜の区別もつかない、長い長い闇の世界になり、禍が蔓延した。困った八百万の神々が、思金神（オモイカネ：思慮の神）にどうすればいいのかと相談をした。宮崎県の高千穂町がその場所だとされている。

古事記にはたくさんの人物（神）が出演。主な主人公たち以外に、一度で消えていくものもあれば、また出てきたかというものもある。すでに“うけい”の占いの段階で 8 人が出演している、しかもそれぞれ名前がある。さて、オモイカネのたてた作戦がこうだ。

長啼き鳥：鶏を集め鳴かせた

鍛冶の神：アマツマラに、鋼を鑄造させた。

その鋼で イシコリドメに八咫鏡：やたのかがみ：を造らせた。

タマノオヤに、八尺瓊勾玉：やさかにのまがたま：を造らせた

祝辞と祭祀の二神を呼び寄せ、牡鹿の肩の骨で占った。

榊の枝に、八咫鏡：やたのかがみ、八尺瓊勾玉：やさかにのまがたま、布帛をかけた。

腕力の神：アメノタヂカラヲが、岩戸の裏に隠れた

芸能の神：アメノウヅメが、胸をあらわに、衣を押し下げ陰部：ホトを見せた。

アメノウヅメの踊りは、八百万の神々にどっとうけた、いっせいに笑い出した。

どんちゃん騒ぎを聞きつけ、天岩戸の中に籠っていたアマテラスが、岩戸を少し開け、「自分が 天岩戸に籠っているのに なぜ楽しそうなのか」アメノウヅメが、「あなたより尊い神が現れたので 祝っています」すぐに祝辞と祭祀の二神が八咫鏡：やたのかがみ：を掲げた。アマテラスは鏡に映った自分を、新たな神だと思い、身体を乗り出したところを、腕力の神：アメノタヂカラヲが、アマテラスを引きずり出した。こうしてアマテラスは、外の世界に戻り、世界にふたたび明るさが戻った。

腕力の神：アメノタヂカラヲは、再びアマテラスが岩戸の中に隠れないために、岩戸を蹴飛ばした。蹴飛ばされた岩戸は、遠く長野県まで飛んでいき、現在の戸隠山になった。

池田清彦著・村上豊の漫画くしたたかで いい加減な 生き物たち>

本の中身、パラパラめくると、何とほとんどが漫画仕立て、「漫画の本 久しぶりだ 漫画なんて・・・」と読みだして、その中身に笑ってしまった。アミメアリ・ライオン・ミナミゾウアザラシ。カクレマノミ・ダンクルオステウス・ヒキガエル・アカシュウカクアリ、この7つの生物の話が描いてある。

はじめに：で書かれている。人間は脳が大きくなり、余計なことを考えるようになった。動物たちは厄介な情念に無縁で、潔く、死を恐れず、残酷である。したたかにいい加減に生きているうちに、子孫を残さなかった系列は、死に絶えただけだ。

◎アミメアリ：働きアリのほとんどがメスで、精子を使わず自分と同じ子孫をつくる。たまにオスがいますが、メスに生殖器がないので、オスは、なんのためにとおろおろするだけ。他のほとんどのアリは、真社会性の昆虫で、女王だけが繁殖に関与する。

◎アミメアリのどこが、なにがおもしろいのか。アミメアリのなかに、“働かないアリ”が大昔に突然変異で出現した。それ以降“働かない”が遺伝的に決定されどんな状況でも働かない。しかも同じような子孫は残していく。同じアミメアリのコロニーに潜り込みそのコロニーを崩壊させ、次のコロニーに潜り込む。“働く”“働かない”どちらも絶滅していないので、バランスは上手くとられているようだ。

◎「お母さん おなかが減った ね・・・」「そうね・・・」「新天地なんて 見つかるの・・・」「さあね・・・」
ごはんにありつけたコロニーが全滅した。とぼとぼ歩くアミメアリの一家、空腹でボロボロである。

◎「あれえ あの穴・・・」「新天地 コロニー・・・?」「こんにちは・・・」

◎「あんなたち どこから来たの・・・」「ええ コロニー全部が 死に絶えた・・・?なんで・・・」

◎「食糧難で みんな ばたばた・・・」「娘を ここに置いてやってくれませんか・・・」親はばったり死ぬ。

◎「かわいそうだから めんどく見てあげる はい ごはん・・・」「ありがとう・・・」むしゃむしゃ。

◎「何してんだよう・・・新入り」「働け・・・ゴロゴロするな・・・」

◎「働き方 わかんない・・・」「すいませ～ん・・・」ゴロゴロ

◎家主の働くアリも、新入りの働かないアリも、子を産む、ごはんを食べる。「むしゃむしゃ・・・」

◎「さあ 喰った 働こう・・・」「さあ 喰った 寝よう・・・」

◎家主の働くアリ、「働いても 働いても 扶養家族が増え やせ細る・・・」コロニーが減びる。

◎働かないアリは、子を連れて、とぼとぼ放浪に出る。

◎ミナミゾウアザラシ：ネコ目：アザラシ科：南極に近い島に住む。メスは400～900キロ、オスは2000～4000キロ。ゾウアザラシ類は、繁殖期にハーレムを作るために、オス同士のけんかがすごいらしい。1500メートル、2時間ぐらい潜って餌をとる。オスは13,14歳からハーレムの主になる争いに参加する。

◎ビーチマスターは、ハーレム内のメスとの交尾権をもつ。栄冠を勝ち得たオスは、餌も獲らず交尾と戦いに明け暮れ、体重は半減し、繁殖期が終わって、海に戻ってもその年のうちに息絶えるものが多いらしい。

◎ビーチマスターになれなかったオスも、ビーチマスターの目を盗んでちゃっかり交尾をする者もいる。最近の研究で、ビーチマスター以外の遺伝子を持つ子供がけっこう生まれるらしい。

◎「ビーチマスターにばれたら 二人とも殺されるけど ねええ やりましょうよ」

◎「だまってりゃ ばれないよ やろうよ やろうよ なかよくしようよ・・・」

◎「やりましよ やりましよ うれしいわあ・・・」

◎繁殖期が終わり、げっそりやつれたハーレムの主は海へ。「戦いと 交尾に 明け暮れた日々 充実した日々 だった が なんだかだるい しんどい 死にそう おぼれそう・・・」主は息絶えた。

◎命をかけてたくさんの子孫を残すのがいいか、日陰でそっと逢瀬を楽しむか・・・。著者は後者を・・・。

- ◎今日は、南山城村の三宅邸で、牡蛎を取り寄せ、バーベキューをするという。少し前から、「いちど うつとこで わいわい やろうよ・・・」といわれていた。相澤・前川・番匠・林・三宅・岡村の6名。まず大阪勢が南山城村に向かった。
- ◎「電車で行かないと 飲めないよ・・・」「それじゃ 今回は オレが運転手」電車ならばどうなるのか調べてみると、歩く時間を入れて3時間足らず、電車賃も1500円、電車で行くには月ヶ瀬はあまりに遠い。それと、「軽る〜く山へ」という計画、「そんなの やめて 食べるだけにしようよ」という声も聞きたくない、飲まないオレの身にもなってくれ、というわけである。山にも行けない。
- ◎岡山出身のMさんが、「牡蛎は・・・」との提案に、「のった」と話が進み、一斗缶で送料込み、7500円を頼んでもらった。店を営業していたころから、何度も牡蛎を取り寄せお客さんに出していたらしい。今回の牡蛎、皆さん嫌になるぐらいたらふく堪能できた。
- ◎JR 月ヶ瀬口駅の前から、国道163号線を上野方面に、Mさんがいたくお気に入りの山“霊山”に向かっている。低い山だというのが、700メートルを超えているので、ポンポン山より多少高い。阪名高速：伊賀ICの南、2キロぐらいのところにある。「すぐだ」というが車で1時間足らず、山の麓をぐるぐる走ると“霊山寺”という看板、そこに車を止めて登る。道路に表示されている温度計では3度だった。
- ◎歩き出した、今は陽がかげり薄暗い樹林帯の中、ひんやりした空気が冷たい。薄汚れた雪が残っている。踏みつけられ、人の歩くところは凍っている、ツルリの所がある。横は薄汚れた雪が残っている、雪の上に様々な足跡がぼつりぼつり、イヌを連れてくる方も多いのか、獣たちに交じって、「これは 忠犬ハチ公かな」というものもある。シカとイノシシの通った後もたくさん見える。風は冷たい、上着を脱いで歩いているが次の休みで羽織った方がいいかな、せっかく作ったオーバー手袋も着けた方がいいかな、冬の装備は数が多く、出し入れが邪魔くさく・・・なんてモクモク歩いている。
- ◎40歳代の頃に、布のオーバーミトンを買った。それをずっと愛用していた、冬の凍てつくなかでも、それをつけるとほんわか指の痛みが無くなった。「ええい 手造り」と先日造った、試着、「これはよし」である。
- ◎この霊山、わくわくする山ではないけれど、てっぺんの眺望はなかなかいい。地図で見ると大阪湾と伊勢湾のちょうど真ん中あたり、大台ヶ原が南にある、何度か行った御杖村、曾爾村、東吉野村も近いところにある、「おおお 地形はこうなっているのか」とあらためてびっくり。さすがに海は見えないが、三重、奈良の山々がポコリポコリン。ここには中世、大きな寺院があったと書かれている、てっぺんに祠がある。
- ◎2時ころに、M邸に帰ってきた、先発隊が火をおこしてくれている、火の上に大きな鍋がどかり、牡蛎が入っているようだ。「さあ 飲みましょう」「ノンアルコオールビールをどうぞ・・・」「おお これ なかなか強い酔いそう・・・」「牡蛎は 鍋から湯気が出てから・・・」「野菜を焼こう・・・」
- ◎湯気が出る鍋の中の牡蛎、期待を膨らませ一口いただいた。大きいサイズ「久しぶりだ うまいねえ・・・」中まで火が通った牡蛎、「もうちょっと ナマツっぽいほうが いいかな」「昔はもっと 美味かった 洗いすぎかな」「衛生を 重視して 何度も水で洗うと うまみが逃げる」いやはや大きな牡蛎を10個以上食べた、なんといっても美味しい。あとから牛肉を焼いて食べた。「これは美味しい・・・」という人もいたが、オレにはそのうま味が伝わらない、「牡蛎の方が そらあ ぜったい 美味しい」
- ◎最後にMさん、「そばを打つ」とやり始めた。何度か彼の店に行ったが、おしゃべりに夢中で、蕎麦造り、何をどうしてどうするという作業はまったく見ていなかった。大きなボールに粉を、水を、カサコソ・・・カサコソ。「水加減が大事・・・」カサコソ。次にそれを麺棒で薄くのばしていく。「よし これでよし」デカイ包丁で細かく切っていく。「おおお さすがにプロ 繊細な細さが ずらりそう・・・」湯がき、水で晒し、ざるに盛る。横でツユを作る。「冷たい 切れ味 スルリ蕎麦」「今日のは よくない 期待にそえない味・・・」そういうけれど、オレは満足。
- ◎夕方5時に、「ごちそうさん 次の山 また 行こう」別れを告げた。吹田まわりで帰った。

天岩戸事件はスサノオの横暴が原因でした。スサノウは高天原から追放されてしまう。

追放されたスサノオは空腹で、大気都比売神：オオゲツヒメノカミに食べ物を求めた。オオゲツヒメは、鼻、口、尻から美味しそうなものを吐き出し、スサノウに差し出しました。これを見たスサノオは、「汚い」とオオゲツヒメを殺してしまった。その死体からいろんなものが出てきた。頭から蚕。目から稲。耳から粟。鼻から小豆。陰部から麦。尻から大豆。

カムムスヒノカミ：神産巢日神はこれらを拾い、地上に授けた。〈死体から食物が出る話は世界的らしい〉

縄文時代の土偶が壊れ、わられた姿で出土している、完全な姿のものが出土することが少ない。ひとつの土偶の破片がよその遺跡から出土してこともある。縄文人は土偶を壊していたのでは、土偶を壊すことが儀式だったのでは・・・古事記ではオオゲツヒメという女神を殺す、縄文人は女神の形をした土偶を創ってそのあとに壊している。土偶という女神の体内から作物を生じさせる祭りを繰り返していたのではないのか・・・。土器にも土偶の顔が付いているものがある、土器の中で煮たり焼いたりして料理され、でき上がった食物を食べる度に、女神が身体から出してくれる食物をいただいているという気持ちになったのでは。古事記のオオゲツヒメは、縄文時代の土偶の女神ではないのか・・・。

スサノオは強く勇ましい英雄のようなところがありますが、誕生したばかりの頃は、「母：イザナミが恋しい」と泣いてばかりで、その激しさで、山は枯れ、海や川が干上がり、災害をひきおこした。

スサノオは古事記では揖斐川に降りるとなっているが、日本書紀では新羅を経て出雲の国に天降ったとなっている。高天原から朝鮮半島を経由して出雲の国に至ったと記されている。スサノオが渡来神であることを示唆している。スサノウは田畑を破壊するなど農耕に対する罪が多い。出雲風土記の鉄関連の伝承と結び付け製鉄神とする説もあります。朝鮮半島から製鉄技術を持ってきた渡来人の神がスサノオということもある。

スサノオが朝鮮半島からやってきた渡来人では、という説を初めて知った。当時の日本からすれば、中国や朝鮮は、超先進国であり超文明国であった。

ヤマタノオロチの正体は、出雲の国の“揖斐川”そのものを指します。血に染まった腹は、鉄分を多く含んだ赤味を指す。揖斐川は氾濫洪水が多く自然災害の多い川だった、門は堰や堤防を造って治水を施したのでは。オロチに飲ませた強い酒は“ヤリオシ：八塩折の酒：何度も醸造した強い酒”
オロチの尾の中から、出てきた剣、“草薙の剣”スサノオはこれをアマテラスに献上する。

スサノオは、出雲の国、斐伊川に降りる。川をさかのぼると娘を挟んで泣いている老夫婦に会います。夫婦は国つ神の“アシナヅチ”と“テナヅチ”、娘は“クシナダヒメ”という。

老翁「私たちには八人の娘がいましたが 毎年山からヤマタノオロチがやって来て ひとりづつ食べていったのです 今年も奴めがやってくる頃になったので 悲しくて泣いているのです」

スサ「ヤマタノオロチとは・・・」

老翁「目はほおずきのように赤く 頭と尾が八つ 身体には苔やヒノキや杉が生え 大きさは八つの谷 八つの河に及び 腹は真っ赤な血が滲んでいます」

スサ「わしが ヤマタノオロチを倒す 娘のクシナダヒメを わしにくれ」

スサノオは、オロチの頭をくぐらせる八つの門を作った。強い酒を造らせ八つの桶に入れ門の前に置いた。姫を守るためにその姿を櫛に変え自分の頭に差した。やって来たヤマタノオロチは、酒を飲んで寝てしまう。スサノウは寝ているオロチの八つの頭を切り落として、ヤマタノオロチを成敗した。